

【2015/8/7 経済学部ワークショップの様相】

《ワークショップ ReD》

## 沖縄戦のドキュメンタリを考える

青柳周一 附属史料館教授

阿部安成 教授



ReD の第 4 回ワークショップは、まえの回で土江真樹子さんがとりあげ、そのさわりだけ上映された沖縄戦のテレビ・ドキュメンタリ「むかしむかしこの島で」（沖縄テレビ、2005 年放送、およそ 47 分）全編を視た。もっとも沖縄らしくないとの評を得たと紹介されたドキュメンタリだけに、その「らしくなさ」が視るときの要点となった。



ドキュメンタリの映像は、沖縄戦を映したフィルムを米国立公文書館から購入し、そこに写されたひとと場所の特定に努める「ドキュメンタリー作家」、かつての自分の姿をフィルムに視るひとたち、そしてドキュメンタリをつくるディレクタを視せる。米軍占領下の沖縄に生きる人びとが視せる笑顔、その映像をいま視るひとたちも笑顔で語りあう。いくつもの「笑顔」も土江さんが指摘した、このドキュメンタリの特性だった。戦争、戦争体験、その回顧を

めぐる、微笑ましさの記録といえるかもしれない。

この映像にはまた、集団死のあった島で、それを生きのびた人びとや、日本兵に殺された老夫婦の生前のようすもとらえられている。いったい沖縄らしい、とはどういうドキュメンタリとなるのだろうか。凄惨な地上戦、たたみ 1 畳に、あるいは 1 m<sup>2</sup>に 1 発もの大量の艦砲射撃、住民の 4 人にひとりが戦死、住民の集団死、日本軍による住民虐殺といった沖縄戦の特質をあますところなく描けば、沖縄らしくなるということか。限られた時間のなかにもあれもこれも盛りこめないことは当然で、なにを、どうとりあげて沖縄戦を表現するのかが、あらためて問われることとなる。

「フィルムの中にね、そこに悲惨な自分たちをみるんじゃなくて、その中にね、不思議な感動を覚えるんだよ」と、さきの作家は語っていた。彼は、沖縄戦のふりかえり方に関心があり、それこそが重要なのだ。「反戦平和なんて関係ない」と彼の記者会見での発言がディレクタによって再生される。作家は 1 フィート運動からも離れる。このテレビ・ドキュメンタリの制作動機も、おそらく作家の活動と意思に沿うところにあったのだろう。「むかしむかしこの島で」と題されたテレビ・ドキュメンタリは、戦争の



回顧が一様ではないことを表現していた。では、戦争そのものはどうなるのか、あるいは、戦争は回顧として考えるべきだということか。

出席者のひとりが、このテレビ・ドキュメンタリはタイトルからして物語のようで、ナレーション（平良とみ）にしてもファンタジー仕立てになっている、戦争の原因に遡及できない、といった指摘があった。ここには大切な論点があるとおもう。悲惨な出来事が人びとに共有さ

れるときに「民話」が持つ機能の一端を、このドキュメンタリがはからずもとらえたのかもしれないし、ほぼ必然として事後に制作されるドキュメンタリが、映像をとおして、ある出来事や事態の原因、背景、始まりを表現したり説明したりできるのか、という問いが提示されたのだともいえるだろう。（阿部安成）